

「自己研修型教師」を育てる研修会のあり方に関する研究

— 持続可能な研修を探る —

坂本 南美 棟安 都代子 神原 克典 安川 佳子 / 吉田 達弘

1 研究目的

この10年余り、学校教育への批判が続き、教員の質について疑問が投げかけられてきた。同時に、世界における日本の役割・地位、そして少子高齢化によって経済構造も大きく変わった。そこへ2011年3月11日の東日本大震災が起これ、様々な場面での一人ひとりの価値観が試され、教育についての捉え方も変わってきた。それはとりもなおさず、これからの社会を生きていくために、教師はどのような生徒を育てる必要があるのかということ問われているのである。

このような社会的背景にあつて、教師自身が学校内に留まっておくのではなく、広く社会的視野を持つこと、教科の専門性を磨くこと、教育そのものについての哲学をし続けることが必要となってくる。教育の不易流行はあるにしても、常に社会変化を捉えながら、どうあるべきかといった事柄を考えるためにも、教師自身が学び続けなければならないのは自明のことである。

この研究では、教育現場に戻った後、大学院での学びをどのように深め、発展させていくか考えていくべきとした英語教師の修了生が集まり、「自己研修型教師」としての成長はどうすれば実現するのかという問いを考えていこうとするものである。これは、教育現場における多くの教師の共通の悩みでもある。従って、本研究では次のような課題設定を中心に、より良い教育実践につながる自己研修会の枠組みを提示しようとするものである。

1) 自己研修型教師とはどういうものか

2) 教育現場での教師の現状を踏まえて、持続可能な学びの形とは

本研究では、この問題について海外における **Teachers Inquiry Groups** についての様々な文献を参考にしながら、「自己研修型教師」を育てる研修会の在り方を探り、自己研修を持続可能にしていくことを目的としている。

2 研究方法 / 研究実践

1) 参加者

参加者、兵庫県在住の大学院修了生4名（全て英語教育を専門とする教員）と助言者の兵庫教育大学教員1名である。修了生の内訳は、中学校教員2名、高等学校教員1名、大学講師1名である。

2) 研究方法

a) 自己研修型教師に関する文献研究

月に1度、半日程度の時間で定期的に読書会を開き、英語教育や教師教育に関する論

文や本を読み、自己研修型教師についての理解を深める。以下のような事柄を文献を読む際のルールとした。

- ① 事前に全員が文献を読んでおき、疑問などを整理しておく。
- ② 順に4名の教員で各章を分けて担当し、担当パートのレジュメを用意し、内容について口頭発表する。
- ③ 発表は内容を明確にするため日本語で行う。

b) 自己研修型教師としての理論と実践の往還

- ・ 課題とした文献の内容に関連して、授業実践の中で生起する疑問点や問題点を出し合いながら、互いの意見交換を行ったり、問題解決を図る。

c) 持続可能な研修会（Teachers Inquiry Group）の試み

- ・ インターネットのウェブ上に、授業実践や学校での問題についてリフレクションをアップロードし、互いにコメントをやりとりする。

3) 実施経過

▶ 第Ⅰ期（2012年4月～8月／月例研修会5回）

- ・ 参加者の教師としての信念や認識、授業における課題や葛藤について、研修会以前の記録として残しておいた。
- ・ 上記の記録について、リフレクションをネット上で共有できるようにした。
- ・ この時期に取り扱った文献：Atkinson (2011). Chapter 1

▶ 第Ⅱ期（2012年9月～12月／月例研修会4回）

- ・ 各自リフレクションを通じた新たな課題設定、または課題解決へ継続的に取り組んだり、ウェブ上で共有したりした。
- ・ この時期に取り扱った文献：Atkinson (2011) Chapter 3,4
- ・ 特に12月においては、授業実践や職場の同僚との問題など互いの意見を直接交換し、問題解決を探ろうと試みた。また、リフレクションの一つとして、一番身近な手段であるジャーナルについて、その捉え方や役割などを議論した。

▶ 第Ⅲ期（2013年1月～3月／月例研修会3回）

- ・ これまでのリフレクションなどを通じた「自己研修型教師」研修会のあり方についてまとめる
- ・ この時期に取り扱った文献：Johnson & Sharkey (2007) Introduction, chapter 4
Johnson (2009) Chapter 7

3 結果と考察

本研究では、12か月にわたって大学院修了生による研修会を行い、以下のような間に対する答えを探求した。

- 1) 自己研修型教師とはどういうものか
 - 2) 教育現場での教師の現状を踏まえて、持続可能な学びの形とは
- ここでは、この研究において明らかになった次の点について考察を進めたい。参加者

は、取り上げた文献を通じて学んだ理論と自らの実践とを往復しながら、自己研修型教師として成長した。その背景には、授業実践への理解を深めるツールとしてジャーナルの活用とそれをもとにしたグループディスカッションの展開があった。以下では、上記の間に対する答えとして、(1) 教師による論文との対話、(2) 理論を通じた実践の再概念化、(3) 自己研修型教師による研修のあり方について報告したい。

1) 教師による理論との対話

まず、この研修会は月例で行われたが、10月の研修会で、参加者は前月に読んだNorton(2011)の論文を振り返ってKが書いたジャーナルをもとにグループディスカッションを行った。この論文では、L2学習者が第二言語を習得していく過程において鍵概念として、*investment* が挙げられている。Nortonは*investment*について、第二言語学習者が、新たな土地で第二言語を用いて生活していくための自らへの投資であると捉え、*motivation* という言葉とは区別している。

Kは、ジャーナルの中でこの鍵概念に触れて以下のように述べている。

“When I read articles about ‘alternative approaches’ to language learning and teaching, I automatically looked back on my own students, classroom and the way I taught students.”

(2012, 9, 1)

Kは、10年以上の教職経験を重ねた後、大学院での研究を修了させ、中学校教育現場に戻った後も研修会を通して言語教育に関する理論を仲間と共に読み進めてきた。これらの経験をもとに、今回“*investment*”について学んだ時、彼は automatically に自らの実践を振り返る作業へと移行していった様子を綴っている。彼の振り返りは授業スタイルだけでなく、そこにいる生徒、授業が展開される教室自体、そして教え方へと広がっている。それは、教室理解につながる場合もあるが、今回の彼の振り返りは以下のような今の自分への問いかけとなった。

“When I read the idea of ‘investment’ on the target language, I question my categorization because it could be a perceived notion based on my own teaching style or teaching taste. I think I can categorize my learners, especially the learners who have difficulties in learning, for a diagnosis of learning troubles.” (2012, 9, 1)

この日のジャーナル前半で、彼は生徒の *motivation* について触れ、教師になった頃はなぜ生徒たちの中に *motivated students* と *unmotivated students* がいるのだろうかという疑問を抱いていたことに触れている。ところが、経験を重ね学校によって事情が異なることを知り、多くの生徒を見てきたことで、“*motivated*”と“*unmotivated*”な生徒たちを独自の価値判断によってのみ分類して捉えるようになってしまっていると綴った。今回、“*investment*”について読んだ後、自分のこの分類は、自分自身の授業スタイルや授業の好

みによる単なる感覚的なものにすぎなかったのではないかと自らに問いかけている。un/motivated learners というこれまでの見方が、“investment”という概念によって揺さぶられ、理論をもって自らに起こる現象を見ることで、新たな“why?”という問いかけをもって捉える視点へと変化している。論文の中の事例を読むことで、彼の学習者に対する見方を多様化でき、論文との対話が行われていたと言えよう。

2) 理論を通じた実践の再概念化

Kはこの日のジャーナルでは、教師の授業スタイルについて次のように綴られている。

“I think my teaching style is strongly related to my own personality as a teacher, but there are a few big events in classroom that might change my style or ideas for teaching English. In a sense, those events may change my personality as a teacher.” (2012, 9, 1)

授業スタイルは教師自身の個性に強く関係しているが、英語を教える上で、時に教室内で起こる大きな出来事が自分たちの授業スタイルを変えることもあると語っている。そして、それらの出来事は教師自身の人格をも変えるかもしれないとも述べている。

教室では、生徒たちとの営みの中で、教師たちが自らの個性や人格までも変えてしまうような出来事を経験する場面がある。それは、プラスに受け止められるものもあれば、自らに批判的に、時に否定的にならざるを得ない場合もある。そこで、教師がそれを内省的に振り返りながら、分析的に全体を把握したり、問題解決の糸口を探ったり、教師自身が自らに問いかけたりする作業を通して、授業や教授スタイル、生徒への視点の重要な点が浮かび上がってくる。それらは、今までの教師としての意識や価値観を覆すものであることもあり、新たな視点を生み出すこともある。Kは、自分の授業スタイルは自分の個性に依存しているが、今、教師としての challenge となる investment に興味が生まれてきたことを綴っている。そして、その概念をもって授業スタイルを捉え直した時、彼は自らの人格をも変える出来事との関連とその可能性を示唆した。

3) 自己研修型教師による研修のあり方

Teachers have their goals and hopes as well as learners. So I think teachers also “invest” their time and energies for their teaching and those investments can be changed by the daily experiences or by some critical events.

I am now interested in teachers’ “investment” as well as learners’. (2012, 9, 1)

Kは、L2 学習者が新しい土地で自らに investment を課しながら、自らを変容させ、新しいコミュニティへと参加していく様子を読み、教師たちが教室で起こる大きな出来事に向き合っていくことが、ある意味では教師の自己をも変容させる investment だと言えるので

はないかと語った。ジャーナルの最後に、彼は教師も生徒と同様に目標を抱いており、自らの時間やエネルギーを教えることに投資 (invest) し、それらの investments は日々の経験や出来事によって変化する可能性があるとの綴った。それを認識した上で教師の investment についても興味を抱き始めたとまとめている。

前月にこの論文を読んだ時にも参加者たちは“investment”について議論していたが、共有のウェブサイトにあげられたKのジャーナルをもとにした次の月のグループディスカッションを通して、この鍵概念をあらためて自分たちの文脈に引きつけながら振り返ることとなった。この月の研修会では、このジャーナルが中学校の文脈での授業の様子を伝える場面であったこともあり、他の中学校に勤める教師の視点や高校や大学といった異校種からの視点を交差させる機会となった。

4 今後の課題と2年度の取り組み

Johnson(2009)は the zone of proximal development as a mediational space という言葉を用いて、「社会文化的な視点から見ると、教師の成長における Inquiry-based approaches は、その性質上、媒介スペースを創り出す可能性を含んでいる」と述べた。Inquiry-based approaches とは、教師たちによる実践改善のための探求であり、教師の経験を互いに共有し共同で分析することは、教師の学びと実践改善につながるとするアプローチである。ZPDはVygotskyによる発達概念であるが、この概念をもとに、彼女は、Teachers Inquiry Group によって創り出された媒介スペース、つまりその public space は、教師たちの現在の能力を可視化させるとともに、まだ十分には形成されていない発展途上にある彼らの能力を明らかにしていくと説明した。そして、その public space の中で行われる会話ややりとりは、教師の学びをサポートする媒介手段として機能すると述べている。

参加者たちは、実際には、文献を読んだその日に自らの教育実践とリンクさせながらディスカッションできる時があれば、後に教室で起こる出来事の中で、あらためて理論が呼びさまされて目の前の教室と理論がつながる時もある。それらを共有ウェブサイト上でのやり取りや次の研修会でのディスカッションを通して、参加者たちがさらに理解を深める場面が多く見られた。今回の彼らの語りは、Teachers Inquiry Group としての機能やその価値をより深く理解する手段となった。参加者は、この研修会でいったいどのような空間にいたのか。

第1年度の研究を終え、ワンショットのものではなく、ゆるやかなつながりを意識したこの研修会のスタイルのもと、参加者たちの語りを通して、そこで学んだ理論が教室での自分たちの営みとつながっていき、参加者たちの授業実践や教室の理解を深めるきっかけとなったことが明らかになった。この理論と実践の行き来は、理論を通して教師たちが教室での出来事を異なる角度から見る視点を得る糸口を作っていた。これらの考察をふまえて、第2年度では、さらに詳しく教師たちの変容を明らかにし、時間に縛られることなく参加できる点に留意し、持続可能性を考慮しながら、「自己研修型教師」を育てる研修会のあり方を提示したい。

References

- Atkinson, D. (2011): *Alternative Approaches to Second Language Acquisition*: New York: Routledge.
- Johnson, K.E. (2009). *Second Language Teacher Education: A Sociocultural Perspective*. New York: Routledge.
- Norton, B., McKinney, C. (2011). *An Identity Approach to Second Language Acquisition: Alternative Approaches to Second Language Acquisition*. New York: Routledge.
- Johnson, K.E. & Sherkey, J. (Eds.) (2003) *TESOL Quarterly Dialogues: Rethinking Issues of Language, Culture, and Power*. Alexandria, VA: Teachers of English to Speakers of Other Languages